No. 938

蛇と生きる

—群馬—

群馬県新田郡やぶ塚町。地名が示すように木々がこんもりと繁ったこの山の中にマムシやハブなど世界中の蛇が50万匹もいる。といっても自然発生したものではない。「日本蛇族研究所」通称〝スネーク・センター〟と呼ばれる約2,000坪の放飼場で飼われている蛇である。山里将悦君（24歳）は3年前沖縄からこのセンターに来た。南国の故郷は猛毒のハブなど毒蛇が多く、その被害も決して少なくはない。
何とか蛇の害を少なくしたいと考えた彼は一通の紹介状を持ってこの蛇の山へ飛んで来た。この日から蛇と24時間のつきあいが始まった。
はじめの頃は怖かったし、気持も悪かった。しかし長いつきあいのうちに蛇はかわいい仲間に変っていった。エサを与え、フンの世話をするうちに人間と蛇との奇妙な信頼関係が生まれた。蛇は喜びも悲しみも決して顔にあらわさない。そのさとりきったような無表情さがたまらなく好きだという彼。
自然界はこれから厳しい季節を迎え蛇もまた長い冬眠生活に入る。蛇とのしばらくの別れが彼にとっては唯一の研究期間。蛇が冬眠からさめる時、彼はまた一つ、蛇についての新しい知識を身につけていることだろう。

常夏の島グァム

蒼く果しなく広がる南太平洋の一つ、サンゴ礁と椰子に囲まれた常夏の島グァム島。
この島を訪れる観光客の8割近くが日本人、まさにグァム島は日本人のパラダイスのようです。
グァム島は、日本の淡路島とほぼ同じ大きさで、しかも自然の景観は、南洋特有の原色の世界です。
人種もチャモロ人、白人、ミクロネシア人からなり、人口は10万人。
水牛が遊ぶ静かな入江に、スペイン時代の面影を残す白い小さな教会を中心にたたずむ村の風景は、まさに一幅の絵画を想わせます。
ギラつく太陽の灼熱を裸の肌に浴びながらサンゴ礁の海で遊ぶ人。
島の中心地アガニヤのメン・ストリートをショッピングする人達、それらの人の多くが現地人との区別がつかぬ程、黒くたくましく陽焼けした日本人の姿なのです。